

平成 2 1 年 6 月の解説（府県天気予報）

【 6 月の天候状況 】

上旬は、北日本から西日本にかけて低気圧や気圧の谷の影響で曇りや雨の日が多くなりましたが、降水量は多くなりませんでした。しかし東北地方の太平洋側では中旬ごろ大雨となりました。一方、南西諸島では晴れる日が多くなりました。中旬は北日本では低気圧や気圧の谷、オホーツク海高気圧からの冷たく湿った気流の影響で曇りや雨の日が多くなりました。東・西日本では晴れる日が多くなりましたが、東日本では上空の寒気の影響で雷雨となった日もありました。一方、南西諸島では梅雨前線が停滞し大雨の日もありました。下旬は始めと終わり頃に梅雨前線が本州南岸に停滞したため、東・西日本は一部で大雨となりました。

月を通しての日照時間は北日本で平年より少なく、特に日本海側ではかなり少なくなりましたが、西日本では多くなりました。降水量は北日本と南西諸島で平年より多くなりましたが、東日本の日本海側と西日本の太平洋側ではかなり少なくなりました。気温はほぼ全国的に平年より高くなりました。

【 6 月の検証結果 】

17 時発表の天気予報で「降水の有無」の全国平均の適中率は明日予報が 84%、明後日予報が 82%と例年（注）よりそれぞれ 3 ポイントと 7 ポイント高くなりました。地方毎の適中率では、明日予報はほぼ全国的に例年より高くなり、特に北陸地方で 8 ポイント、近畿地方で 5 ポイント高くなりました。明後日予報もほぼ全国的に例年より高くなり、東日本と近畿、四国、九州地方では 8 から 13 ポイント高くなりました。また、明日の最高気温の予報誤差は全国的に例年を下回り、特に東海、四国地方では例年より 0.5 小さく、全国平均は例年より 0.3 小さい 1.7 でした。最低気温の予報誤差はほぼ全国的に例年並みで、全国平均は例年と同じ 1.3 でした。

（注）例年値は気象庁 H P（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【 6 月の天気予報から 】

6月15日は、日本の上空に寒気を伴った気圧の谷があって大気の状態が不安定となり関東地方では雷雨などが発生しやすい状況でした。

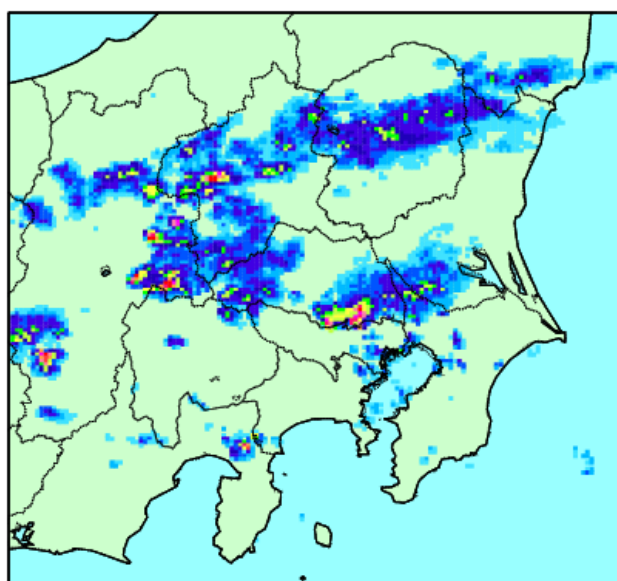
前日14日に予報を検討する時点では関東地方北部ほどこの寒気の影響が大きく、広い範囲で雷雨となる可能性が高いものの、関東地方南部では寒気の影響は比較的小さく、不安定による降水は局地的であると考えました。

このため、14日17時発表の15日の東京地方の天気予報は「曇りで 所により夜 雨で雷を伴う」、18時から24時の間の降水確率は40%としました。

15日当日は夕方から関東地方の山沿いで積乱雲が発生しはじめ、19時には関東地方北部を中心に広い範囲で雷雨やにわか雨となりました。東京地方では図1のように多摩地方や23区西部の一部に雨雲がかかる程度でした。しかし、21時頃になって神奈川県の一部から千葉県の一部にかけての地域で急に積乱雲が発生し、東京地方では23区を中心に雷雨となり、大手町では21時から24時までの3時間に33ミリの雨を観測しました（図2）。

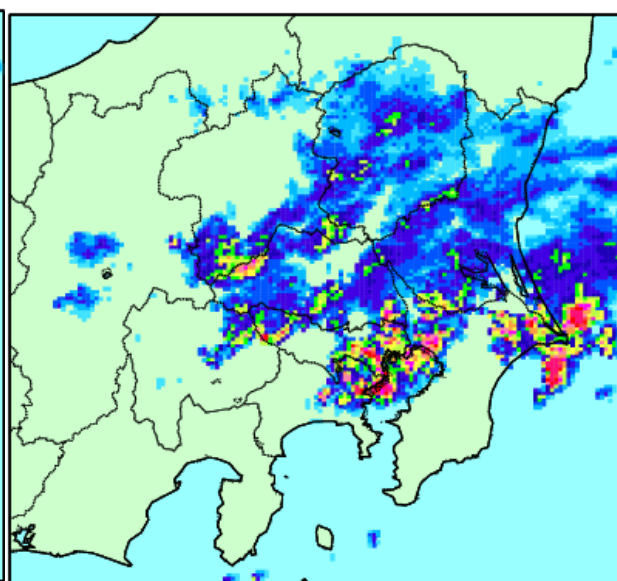
大気の状態が不安定となって積乱雲が発生し強い雨となる場合は、日照による気温の上昇や地上付近の風向き・強さの分布状況、地形などの要因により、雨の降る場所を特定して予報することが難しい場合です。

天気予報で「所により雨」「雷を伴う」と発表している場合には、大気の状態が不安定で局地的な強い雨が降ることがありますので、天気の急変に注意して行動されるようお願いいたします。なお、気象庁ホームページでは、大雨や雷に関する警報や注意報の発表状況や気象レーダー画像で強い雨域の状況を確認することができますので、ご利用下さい。



2009/06/15 19:00(JST)

図1 平成21年6月15日19時のレーダーエコー



2009/06/15 23:00(JST)

図2 平成21年6月15日23時のレーダーエコー

【8月の天気予報の利用にあたって】

8月は9月と並んで台風災害の多い月です。1971年～2000年までの30年間の平均では、8月の台風の日本への接近数が3.4個、上陸数は0.9個でそれぞれ1年の中で最も多い月になっています。最近では2004年が多く、8月の接近数は6個、上陸数は3個で、暴風、大雨、高潮などによる災害が全国各地で発生しました。台風が日本付近を通ると予想されている場合には、常に台風情報、注意報、天気予報などの最新の気象情報を入手して十分に警戒するようにして下さい。なお、気象庁では21年4月22日から5日先までの台風の進路予報を開始したので、ご利用下さい。